

人権ほつと2年2月号

「マイクロアグレッション」

大阪教育大学 准教授

安達智子

私達は、海外から来た人に「日本語がお上手ですね」「箸使いに慣れていきますね」などと話しかけることがあります。会話の取っ掛かりであったり、褒めてあげたいなど、その理由は様々ですが、このような言葉掛けが嬉しくない人もいます。背景には、外国人は日本語が流暢ではない、箸に慣れていないとの先入観があるからです。

このような先入観からくる微妙に否定的なニュアンスを含む言動をマイクロアグレッションと呼びます。明らかに差別とは異なる些細なことであるため、アグレッションを発した本人も気づいていないことが多いものです。たとえば、上位職にのぼりつめた女性に対して「どうやって管理職にまでなれたの？」と尋

ねる、この背景には女性が上位職に登用されるのは難しいはずだという考えがあります。

また、女性の多い保育園で働く男性保育士に対して、「うちは男性への差別は決してないはず」と言い切る、そこには個人や職場がもっているかもしれない差別や偏見の存在を否定してしまっているという考え方があります。

アグレッションを受けた側が自分は理解されていない、何かがおかしいと感じても、周りには、気にし過ぎだよ、悪気はないから、たまたまでしようなどと、その悪影響を見過ぎがちです。すると同じことが日常のなかで繰り返され、受け手は不快感をつのらせていくことになります。

マイクロアグレッションについて、こうするべきだという統一的な見解はありません。まずは、マイクロアグレッションがあるという事実を理解すること。また、自分とは異なる立場、背景、価値観や意識をもつ人々を知るため

の努力をすることが大切な第
一歩になるはずです。